土門辛聞

コメ主体の現行所得補償制度に「涙が出る思い」と語った篠原副大臣

土門 剛 どもん　たけし

【プロフィール】
1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

「梁山泊」での出会いがきっかけ

１９９６年総選挙であえなく落選された山田正彦農水大臣は、議員宿舎から洋服屋だった神田のしもた屋に移られて、「梁山泊」の看板を掲げられた。明治の初期、早稲田の創設者、大隈重信が東京の私邸に若手官僚を集めて政談にふけった故事を、早稲田出身の山田大臣がならったのかもしれない。

筆者も、その「梁山泊」によく通った。政談なんかまるで興味がなかった。大臣の地元支持者（長崎県五島列島）が送ってくる魚が目当てだった。冬になると、地元の支持者がたっぷりと脂ののった新鮮な鯖をたっぷりと送ってくる。ある時は、発砲スチロールの箱に30本近くも送られてきたことがあった。

「これを五島ではしゃぶしゃぶにして味わうのだよ」

不器用そうな大臣が、鰹出汁のスープをたっぷりと入れたしゃぶしゃぶ鍋に、短冊に切った大根と、薄造りにした鯖をさっとくぐらせ、客人に、「これが五島名物の鯖しゃぶだよ」と振る舞ってくれた。いろんなものを食べてきたが、素朴な料理ながら、ホントに美味しかった。

その「梁山泊」に、「農水省に面白い方がいらっしゃいますので、今度、ご自宅にご案内しますよ」とお連れして引き合わせたのが、当時、農林水産政策研究所に移られて間もない篠原孝さんだった。管直人政権で農水副大臣になられた、あの篠原さんである。今から10年ほど前のことになる。

篠原さんは、２００３年総選挙に出馬される。その報を耳にして、ちょっと無謀かなと心配たこともあったが、そんなものは吹っ飛んでしまった。日頃からとても愛郷心の強い方で、役人生活に見切りをつけて、案の上、選挙区では自民党候補に僅差で敗れたものの、比例区で見事に復活当選された。昨年8月の総選挙では念願の選挙区での当選を果たされた。

代議士になられてからは、あまりお目にかかる機会はなかった。別に敷居が高くなったというわけではなく、お忙しそうにしておられることをメディアで拝見するに及び、つい声をおかけする機会を逸しただけである。

その篠原さんが、山田大臣の下で副大臣としてお仕えになられると知って、「へぇ〜、こんなことってあるんだな〜」と驚き、10年も前の「梁山泊」でのお二人の出会いのことを感慨深く思い出したりもした。お二人には失礼だが、外見も中身もボワァ〜としたところがあるものの、ずいぶんと似て非なるところがあるように思う。

ひとつは、スケール感に差があること。山田大臣は、盃を重ねるにつれ、デッカイ夢物語を身振り手振りで熱っぽく説明しておられた。今でも耳にこびりついているのは、日本海のド真ん中にネットを張って、巨大養魚場を作るんだという話である。さすが幼少の頃より海ばかり見ていたら、思いつくこともスケールが違うなと妙に感心したことがある。

その篠原さんの人となりは、ご自身のブログにも書いておられるように、「朝コケコッコーの声で起きてしまうこともありました。残飯が主な餌で、今高騰している輸入飼料穀

物などありませんでした。家で作ったとうもろこしを乾燥させ、冬仕事に、機械に上から突っ込みグルグル回すと粒が取れていく。自給飼料造りでした」という素朴な話が多い。

篠原さんは、信州・中野市生まれ。海で育った方と、山で育った方のスケール感の発揮の仕方は違うものだなと妙に感心してしまった。

環境保全型農業で世論をリード！

ただ篠原さんとお話をしていて感心するのは、エコロジー（環境）にものすごく思い入れがある点だ。彼が、農水省農林水産政策研究所の所長時代に、環境活動家のレスター・ブラウン氏を招聘されたことがある。従来の農水官僚では、思いもよらない発想で、さすが篠原さんと秘かに拍手喝采をしたものである。

環境保全型農業、これは篠原さんの造語であると、ご本人がどこかの講で語っておられたのを講演録で拝見したことがある。今から30年も前のことで、その炯眼にはただただ敬服している。所長時代には、こんな講演もしておられたという話が、社団法人日本草地畜産種子協会の情報誌「グラス＆シード」に紹介されていた。

「篠原孝所長は、アメリカからの輸入飼料の代わりに、日本のふん尿をアメリカに持って行けと、言っています。窒素の移動が輸出国と輸入国の環境を破壊する。これを正していかなければ、21世紀の日本の国土も、畜産もない。輸入飼料加工型畜産がこのままでいいかを、厳しく問う必要があるし、ＢＳＥは、あなた達のやっていることは間違いだと示したことを、知らなければと思います」

これをどう受け取られるかは、読者のご自由である。輸入飼料加工型畜産の是正は、筆者も共感するところがあるものの、篠原さんの考えにはあるところで引いてしまうような点がある。僭越を承知で一つだけ違和感を指摘させてもらうと、そのふん尿を移動するコストがどれだけかかり、誰が負担するか、という点である。エコロジー（環境）は、時常にエコノミー（経済）の裏打ちがなければ、単なる夢物語に終わってしまうことになる。こんなことを言ったら、篠原さんから大目玉を食らうかもしれない。

フード・マイレージ、この言葉も篠原さんが初めて導入されて、日本に定着されたと、ご自身のブログで語っておられる。農林水産政策研究所が、「相手国別の食料輸入量」に「輸送距離」を乗じた数値を、「フード・マイレージ」として提案され、その数値が大きければ大きいほど、海外に食料を頼っていることを示すだけでなく、それを運ぶエネルギー消費も多くなることを意味する。

有機農業の運動に熱心な方を中心に、この言葉はパッと拡がった。あたかもファッションのように拡がっていく動きをみていて。天の邪鬼な筆者は、日本列島は南北に長く、北海道より上海の方に近い西日本は、メード・イン・チャイナの農産物や食品を輸入しろという意味なのか、と勘ぐってみたことがある。

この話題はこの辺にしておこう。断っておくが、環境保全型農業もフード・マイレージの考え方も、決して否定するわけではないが、私たちがどうしてもお聞きしたいのは、１億３０００万人の胃袋をどうやって満たしてくれるのかというのが国の食料政策の根幹であって、環境や国産品奨励の「篠原ワールド」の教義を広めることが副大臣としての務めではないかと思うのだが。

懸念される財源と10a1万5000円の補償額

６月９日、組閣直後の就任会見で、山田大臣に対して、記者が篠原副大臣についてこんな質問が放っていた。

記者　「篠原副大臣なんですけれども、以前、民主党の進めていた、赤松農政下で進めていたモデル事業等の取組みに対して、かなり批判的なことを、ブログやメディアの取材に対して発言をされていたかと思います。けれども、副大臣就任にあたって、大臣と、その辺のところは、どういうすり合わせというか、何らかのお話をされたのでしょうか、というのを、お話聞きたいのですが、よろしくお願いします」

これに対する山田大臣の回答はこれ。

「篠原さんについては、たしかに民主党の農業政策について、いろいろ批判もあったことは承知しております。まだ、電話でしか話していませんが、彼も、『私も組織人だから、山田大臣の言うことには従います』と、そう言っておりますので、そういうのを受けていただけると、そう思っておりますので、何の問題もないと思っています」

最初、これを目にした時は、何のことに言及しているのかまるで分からなかった。山田大臣も篠原さんも、肝胆相照らす仲がいまも続いていると思っていたからだ。ただちょっと気になることはあった。

農家戸別所得補償が公表された時に、篠原さんがこの政策を痛烈批判したコメントを日本農業新聞などで

ご披露されていたことである。

「急ぎすぎだ。涙が出る思いだ」（昨年10月19日付、同紙）

　これには正直驚いた。農家戸別所得補償は、篠原さんが言い出しっぺのように世間では見ているし、ご自身もそのことをブログで書いたり、講演したりしておられる。その篠原さんが、なぜこんなことを言い出すのか、思案投げ首だったが、ご自身のブログで次々と理由を明らかにされておられた。

　昨年11月11日の「歪められた農業者戸別所得補償」というタイトルの記事は、同じ与党の議員と思えないほどの激越ぶりだった。

「ちょうどその密着取材を受けているとき、私が長年関わってき農業者戸別所得補償が、来年度はコメを先行させるモデル事業で５６００億円を予算要求することが決まり大変な衝撃を受けた。私が手塩にかけて育んできた政策が、音を立てて崩れていく。麦・大豆・菜種・そば・飼料作物といった土地利用型作物にコメ並みの所得を補償することにより、コメの過剰を減らし自給率も高め…　…と狙っていたのに、コメを先行させては何にもならない。「馬鹿な…」と声をあげずにいられなかった。このいびつな形の事業（２０１１年度に１兆円で開始するのがマニフェスト）は既に政府内で決定されており、我々は関与しようがないのだ」

　今回の戸別所得補償に反対する篠原さんの怒りがだんだんとエスカレートしていく様子が手に取るように分かる内容だが、あらためてこの記事を熟読してみて、筆者はあることを思い浮かべた。

　このブログが出た直後の11月19日、戸別所得補償制度で財務省と農水省が対立というニュースが飛び出てくる。当時の藤井裕久財務相や野田佳彦副財務相が、「農業はコメだけではない。転作によってトウモロコシやダイズでも良いではないかと」、「本来は（自給率向上を目指す）麦や大豆の方が順番は先だ」と述べ、コメの先行実施を目指す農水省に再考を促す考えを表明している。

　このニュースを聞いて、概算要求などで財務省とも根回しが終わっているはずなのに、なぜこんな話が飛び出してくるのか、当時はさっぱり分からなかった。いまこうやって、山田大臣の記者会見での発言なり、篠原さんが書いたブログ記事なり、当時の藤井財務相の発言を並べて時系列に追ってみると、この時の騒動の主は篠原さんであることが容易に想像できた。篠原さんがブログでおっしゃっていたことと、まったく同じことを財務相も副財務相も記者会見で述べられている。点が動かぬ証拠のようでもある。

　現行戸別所得補償か、篠原さんの持論「麦・大豆・菜種・そば・飼料作物」先行論か。「二者択一」のような、この議論、どちらが正しいか、筆者には答えがすぐに出てこない。ただ篠原さんの批判でちょっと物足りないと思うのは、コメ改革について踏み込んだ議論にほとんど触れていない点である。このコラムでも戸別所得補償について、財源については筆者もちょっと多すぎる嫌いがあると注文をつけてきたが、コメの改革に大胆に踏み切ったことで、ある意味、トレード・オフの関係で仕方がない面があるかなと勝手に総括している。

　それに加えて、転作作物奨励という形で、このような制度設計にしたことは、ある意味、政策的な合理性もあり、そういう点を加味すれば、現行戸別所得補償の方に歩がありそうな感じがしてならない。篠原さん持論の「麦・大豆・菜種・そば・飼料作物」先行論も、きちんと突き詰めていくと、結局、同じ結論に到達するのではなかろうか。

「涙が出る思いだ」

　このコメントを筆者なりに忖度すると、ご自身が制度設計に関与できなかったことに対する、不満なり、怒りが、このような形で表現されたとお見受けした。篠原説に財務省のツー・トップが乗ったのは、決して「麦・大豆・菜種・そば・飼料作物」先行論に与したとは思えない。財務省にとっては、そんなことはどうでもよいことであって、戸別所得補償の財源にどれだけ切り込むことができるか、その一点でしかないはずである。

　親しくお付き合いをいただいた篠原さんにはとても悪いが、相手は、政治家として役者は一枚も二枚も上手と見た。篠原さんの持論に乗ったフリをして戸別所得補償の財源を圧縮することしか考えていないと見るのが順当ではないか。それだからこそ、財務省のツー・トップが概算要求で決まったものをひっくり返すような言動をしてきたのである。財源はそのままでも、対象品目が拡がり、コメ農家への１万５０００円が減額されることも大いにあり得る。

　予算カットを目論む財務省や官邸に篠原さんがうまく利用されているとは思いたくもないが、いずれこの時の経緯を篠原さんから、きちんと説明を聞きたいというのは、筆者だけではなかろう。